

第七章 ふるさとの言葉

第一節 方言あれこれ

方言については、三花地区だけの方言があるわけではないので、どうせん日田方言のなかに含まれる。しかし、日田方言では広く日田市、日田郡も含まれ、そうしたどちら方のなかでは、三花は日田地域の北端にあたるので、南端の津江地区あたりとはいくらか違っているようだ。

日田方言は、大分県のなかでは特異な存在で、その特徴をひとことでいえば、肥筑（肥前・肥後・筑前・筑後）方言の影響を強くうけていることだ。

つまり日田は、隣り合っている筑後や肥後と同じ方言を多くもつ地域で、「バツテン」や「どうしたバイ」という、語尾の「バイ」「タイ」などがその代表格である。

日田方言は、まだじゅうぶんな研究ができてないが、これまでの研究のなかでは、肥筑方言の影響がきわめて強く、豊前（北）からの影響は少ないと見られている。筑後や肥後からの影響はどうせんと思えるが、日田方言には北の豊前方言と似たものが多く、豊前からの影響も決して少なくはない。こうした日田方言のなかで、豊前（下毛地区など）と隣接することから、豊前方言の影響を多くうけたことが、三花を含む日田北部地区の特徴といえる。

軽く数千語はある日田方言を、並べる紙幅もないのに、特徴のある五〇語ほどをひろい、紹介することにした。あわせて、先人の暮らしのなかから生まれた、方言の「ことわざ」なども加えた。

アルキ

正月アルキや盆アルキなどといって、親類の家にお客として行くことを「アルキに行く」という。アルキは、いうまでもなく動詞の「歩く」からきている。どこへ行くにも、歩いて行くしかなかつた先祖の暮らしがしのばれることばである。

イエウチゲーサ

「隣は、イエウチゲーサ、運動会見にいちよる」など
という。イエウチゲーサは、「家内じゅう・家族ぜんぶ」
ということ。

豊前方言では、ヤウチゴーサイ（家内合切）といふそ
うだが、これが日田では、「イエウチゲーサ」となつた
ようだ。

イグラヤ

家をたずねられたときに、「あすこんかどのイグラヤ」

などといった。イグラヤだけで家がわかつたのは、むか
しは草ぶきの家が多く、イグラヤが少なかつたからだろ
う。
イグラヤは、日田では一般に「かわらぶきの家」や、「土
蔵づくりの家」をいうようだ。豊前や浮羽方面でも使わ
れるという。

イヤリ

蟻ありをイヤリと呼ぶ。平安時代の古書『和名鈔』に赤蟻
を「伊比阿里」とよむ、とあるので、これがイヤリとなつ
たようだ。

江戸時代の日田の国学者、森春樹の『俚言鈔』には、
『和名鈔』の例もひき、「いひ蟻」として「飯につく蟻
也」としているので、本来は残飯などにたかる、ごく小
さな赤アリのことのようだ。いずれにしても、千年以上
ものむかしにさかのぼる由緒正しいことばだ。

イツチエンギ

「山田原はイツチエンギすいか畑」といえば、「そこら
あたり一面」ということ。「イツテンゲ」ともいい、「全

域・一円」の意味であるが、日田以外ではほとんど使わ
れない珍しい方言のようだ。

イビシー

「イビシー、大きなへべ（蛇）がおる」。

イビシーは、日田では「気味がわるい」の意味で使うが、
県下でも「いやらしい・恐ろしい・きたない」の意で使
うところがある。イビシーは、古語「いぶせし」が語源
で、もとの意味は、「うつとうしい・気持ちが晴れない・
不快である」などの意である。

蟻ありをイヤリと呼ぶ。平安時代の古書『和名鈔』に赤蟻
を「伊比阿里」とよむ、とあるので、これがイヤリとなつ
たようだ。

ウスル

牛馬を使うことがなくなつたので、もうまったく使われなくなつたが、牛や馬の背に荷を積むことを、「牛にウスル」などといつた。

これは、牛に「負おわする」のオウがウとなり、ウスルとなつたものである。

ウツスエー

食物の美味の反対で、「まずい」こと。豊前と筑前の一部で使われた「ウツサイ」のなまりである。ウツサイを使わない、筑後などでは、「ウマムネー」、「ウンモナカ」というばかりというが、ウツスエーはそれに比べると、まずさを強調する響きがある。

ウワントナ

がんこ者の親より、「息子はまだウワントナ」といえば、息子の方が親に輪をかけたがんこ者ということだ。

「うわて」とか、「上位」とかの意で、上段の「上の棚たな」が語源だろうか。博多周辺部の方言に「ウワンドン」があり、同じ意味で使われている

オーカン

子どもたちが道路で遊んでいると、「オーカンデ アスブ コター ナラン」とオゴラ（しから）れた。オーカンは「往還」で、もともとは行き帰り、つまり往来のことだが、それが道をさすようになったようだ。

しかし、小道はオーカンとは呼ばず、三花地区では中津へ向かう街道が、代表的なオーカンだった。天気がつづくと、バスが土ぼこりをもうもうとたてて走つた、むかしの往還が懐かしい。

オロイー

「品物がオロイー」は、品質がよくないことで、「オロイーこつする」は、「わるいことをする」の意になる。いまでは余り聞かれなくなつたが、「きょうは、きのうよりオロ寒い」といえば、きのうより寒くないことだ。オロイーの「オロ」は、古語の「疎（おろ）」で、「完全・不十分であること」や、「たしかでない」「わざか」などの意をあらわす。

共通語の「うろ覚え」の「うろ」は、「おろ」の転じたものという。オロイーは筑紫方言で、九州では広く使

われている。

カイとなる

「軒さきのカキの木を伐つたら、カイとなつた」といえば、うつとうしい物を取りはらつたあと、さわやかな感じをいう。

トンネルをぬけ出たときの感じも同じで、「カイとする」ともいう。語源はわからないが、快感の表現であるので、「快」に関係がありそう。日田独特の方言のようだ。

カザ（クワザ）

高い枝先のカキの実などを採るときに使う。竹ざおの先をふたつに割つて、これにカキの枝をはさんでもぎとする。日田の先哲、森春樹が江戸時代に書いた『俚言鈔』に、「梨及柿などを取るくわざ也　余考るに字に果叉の字有て物の実を取る物也　これ全ここに云くわざ也」として、「果叉」の字を当てている。

この「カザ」を、いまどのくらいの人気が知っているか、大分大学の松田正義名誉教授が昭和五四年に調査をして

いる。

日田の老人（平均年齢七〇・五歳）と中学生、それぞれ四〇人を対象にした調査結果は、老人は八〇パーセントの人が知っていたが、中学生ではわずかに三パーセントだったという。

残念だが、カザを使うことがほとんどなくなつたので、この方言もやがて忘れられる運命にあるようだ。

カタグル・ニナウ・ナカズル・カク

いまでは肩を使つて物を運ぶことは、ほとんどなくなつたが、むかしは肩にかつぐことが多かつた。

その場合、①材木などをかつぐ　②ロクシャク（天びん棒）をかつぐ　③二人以上でかつぐ、の三態があり、これを日田ではそれぞれ違つた形で表現する。

①材木は「カタグル」②天びん棒は「ニナウ」③二人で「ナカズル」、または「カク」。

こうした使いわけをするのは、西日本の特徴だそうで、福岡県下の方言調査によると、二人でかつぐ場合、豊前から筑前東部はカク、筑前と筑後西部はニナウ、筑後と筑前南半分はナカズル、だそうだ。

三花地区は二人でかつぐ場合、ナカズルとも、カクと

もいうが、ナカズルは筑後から、カクは豊前から、双方の影響を受けているのが興味ぶかい。

シネビツと呼んだ。

ケンタイ

クリがヨム

秋になるとクリのイガがはじけて、つやつやした褐色の実をのぞかせる。クリが熟ることを「クリがヨム」といい、さらになまつて、「クリがユージョル」ともいった。カキがヨムとはいわないので、ヨムは、クリなどの果実が熟れて、裂け目から実がのぞく状態だけをさしていう。

ヨムは、「笑む」のなまりで、優雅なことばだが、もうあまり聞かれなくなつた。

(小倉)方言集には「あの男は『ケンタイ』で私の家で飯を食う」とあり、(あたりまえのように いばつて)と解釈があるので、豊前方言と思われる。

日田の場合でも、①遠慮がない ②いばつている③当り前のようにふるまう、だいたい、そつした態度をさしている。

語源は、「公然」とか「表向き」の意をもつ古語「けんたい」のようだ。

ゴテ

「ゴテが痛い」などというときのゴテは、おもに背中をさす人が多いが、もともとは体ぜんたいの意味があるようだ。

もともとは、古語で自家食用の穀物のことをケシネといつたというが、日田の場合は、「米麦をついて精白にすること」、または「飯米」のことをそう呼んだ。

これは「五体」がなまつたもので、ゴテゴシラエ(五体ごしらえ)は、山仕事や農作業などの身仕度のこと。また、なにも持たない手ぶらのとき、スゴテ(素五体)な

どという。

コーバシ

幼いころに食べたコーバシ。むせて、あたり一面に粉を吹きちらした思い出をもつ人も多いはずだ。

コーバシは、新しくとれた裸麦を煎つて粉にひいたもので、筑前・豊前のハツタイコの方が通りがいい。

筑後や日田はコーバシで、語源は文語形容詞の「香ばし」を、そのままばり名前（名詞）にしたものだ。

コブリ

昼食と夕食とのあいだ、または朝食と昼食とのあいだにする簡単な食事がコブリで、「間食・おやつ」の意。

農繁期には、あちこちの田畠でコブリの風景がよく見られた。

コブリは、小昼こじゆがなまつたもの。本来は正午に近い時刻をさすことばだが、転じて古くから間食の意味で使われてきた。

サマンコ

「窓」のことだが、現在のガラス窓などとは、だいぶんおもむきが違う。「さま」も古語で、「狭間」の字を当て、狭く小さいすきまのこと。

むかしの城壁の、矢や弾丸を放つための小窓も「さま」と呼んだという。サマンコは、この「さま」からでており、九州各地でも、「窓の格子・明りとり・部屋の下についている窓」などを「さま」と呼んでいたようだ。

小屋ンツジ

ツジは「屋根裏の物置き」のこととて、子どものころ、「小屋ンツジ」や「馬屋ンツジ」で遊んだという人も多い。

三花地区では濁つてツジというが、もともとは古語「つし」で、辞書には「屋根裏に箕子すのこでしつらえた物置き」とてている。

豊前方言でも、屋根裏をツシというそだが、箕子すのこで天井や天井裏をツシと呼ぶのは、全国各地に多いという。

寒力ツツ口一

「寒かつたでしょう」の意。もう余り聞かれなくなつたが、高齢の人からたまに耳にすることがある。

「ツツ口一」は古語「つらむ」で、推量、つまり人の心などをおしはかることばだ。「寒かりつらむ」がなまつたもの。風呂の湯かげんがぬるそなときは、「ヌルカツツロー」となる。

共通語では消え去つた古いことばが、方言として、めんめんと続いてきたわけだ。

サンケラ (サンキラ)

「サンケランハ (葉)」ともいう。植物の「さるどりいばら」のこと。

かしわ餅をつくるときは、むかしはみんな近くの野に行つて採り、これで包んだ。語源は、「さるどりいばら」の俗称「山帰来」。

大分県南では、サンキレと呼び、これで甘酒まんじゅうを包むという。県内でカカラ・カンカラといふところもあるが、呼び名は違つても、いずれもまんじゅうを包むのに使つてゐる。

サンゲンアシ

年輩の人ならだれでも知つてゐる「竹馬」のこと。昭和二〇年代ごろまでは、だれも竹馬などとはいわなかつた。

脚が長いので、「三間足」と思つてゐる人もいるが、これは「さきあし鷺足」がなまつたもの。「さぎあし」とは、うまく名づけたものであり、この優れた呼び名を、先祖はタケウマなどと呼ばずによく残してくれたものと思う。「さぎあし」は各地でなまつて、博多では「サンギヨーシ」、県下でも「サイアシ・サンガシ・サンゲアシ」など呼ばれている。

シモアゲ

廣瀬淡窓の休道の詩に、「柴罪曉ニ出ヅレバ霜雪ノ如シ」とあるように、日田は晚秋から冬にかけて霜の日がつづく。

朝、まつ白に霜が降りた日は、だいたい気持ちよく晴れる日が多いが、たまに、霜の日に天気がくずれて雨になつたりすることがある。シモアゲは、こうした気象現象をさしていう。

シャベー

「この突っぱりはシャベー」などという。豊前方言の「シャバイ」のなまりで、「かよわい・ひよわい」などの意。

「こんだん牛やシャベー」といえば、「今度買った牛は、か弱くて力がない」ということになる。人の評価にも当て、その人の「力量が足りない」という場合にも使う。

ジヨーモン

なんといつても日田方言の代表格で、「美人」のこと。上の品物をさす「上物」からでている。

「どこそこのジヨーモンサン」などというので、「美人」から転じて、「娘さん」の意にも使う。

ジヨーモンは、もともと博多周辺の獨得の方言で、それが日田まで及んでいることは、博多（福岡）という大都市のもつ文化の力が、日田まで影響していることの証明でもある。

シルシー

「年をとると、晩にでかけて行くのがシルシー」。シル

シーは、本来はじとじと降る雨にぬれる不快感をいう語であるが、気持ちのうえで、面倒で気のすすまぬ心情のときにも使う。

語源は、「汁」からでた「シリイ」といわれる。シリイはぬかるみのどろどろした状態をさす語で、「ジリー」（じめじめしている）も、これから出ている。

シルシーことはいろいろあるが、税務署にでかけることも、かなり「シルシー」うちにはいる。

シルル、シレン

「近ごろ目がわるうなつて、ユ一（よく）シレンごつなつた」。

シルルは見えるで、シレンは見えないことをいい、いまだも年輩の人からよく聞く。

日田獨得の方言と思っていたら、筑前の築栗さくらぐりや筑後の一部でも使われていたという。「シルル」は、「知る・知れる・知られる」の転義か、あるいは、「目立つてはつきりしていること」を指す、古語の「著し」が語源かとも思われる。

センタブツ

「センタ」ともいう。子守りのとき、子を背負つたうえから着るもので、「ねんねこ」のこと。日田独特の方言のようだ、代表的な国語辞典『広辞苑』（岩波書店）にも、「大分県日田地方で守女着物（もりめぎもの）をいう」とてている。

なお、子守りのとき背負う帯を、イッケオビといったが、これは「結いつけ」が、「イッケ」になまつたものだ。

ソバオシキ

もうソバオシキ（むさきび）も見なくなつた。リスより大形で、大木のウロ（空洞）にすみ、肢間に皮膜があるので、それを使つて木から木へ鳥のように滑空する。

ソバオシキの名は、「傍折敷」からきている。折敷とは、薄板でつくつた角盆や隅切盆で、むかしはこれに食物を並べた。多種あつて、傍折敷は神前に食物を供えるときの縁つきの角盆。

ソバオシキの滑空する姿が、これに似てゐるので名づけたと思ふが、動物にお盆の名をつけるとは、先祖の

ユーモアがしのばれて面白い。

ツクリンショ

セミの「つくる法師」。ツクリンショは、わずかな気配で鳴きやむので捕りにくい。

昭和二〇年代ごろまでの子どものセミ取りは、竹ひごをしゃもじ形に曲げて竹ざおにとりつけ、それにクモのネバ（巣）を幾重にもからめつけ、トリモチのようにして捕らえた。

ツクリンショは、その鳴き声からの命名だけに呼び名も多様で、日田市内でも、「ツクリツシヨ・オーシンチヨコチヨコ」などと呼ぶところもある。

テーガテー

人ままで恥ずかしい思いをするのが「テーガテー」こと。方言らしい響きから下品なことばと思つてゐる人もあるが、語源は「耐え難い」だから素性のいいことばだ。「そげなこつしたら、テーガテー」の場合、「人に対して面目ない」の意味になる。

小倉の一部でも使つたそつだが、こちらは人を待つて

いて、いろいろするときの「耐え難さ」をいうそだ。

トゼンネー

「話しひぎがおらんなき、トゼンネー」は、「話しご相手がないので寂しい」こと。

「この子はいうこつ聞かんて、テーコツマワス」といえば、手におえなくて余すこと。テーコツの語源は、「耐え事」かも知れない。

豊前方言でも「テーコトマワス」とい、同じ意味で使う。

テーコツするほど、つぎつぎに実のなる豆に「テーコツ豆」(さやいんげん)がある。

トゼンネーのトゼンは、吉田兼好の『徒然草』の徒然で、本来は、「することがなくて暇だ」、つまり退屈のこと。

それが孤独の寂しさを表すことばとして、今日まで年を超えて生きてきたわけで、こうしたことばは、ぜひ長く残したい。なお、トゼンネーは、トゼンナイのなりだが、この「ナイ」は否定ではなくて、形容詞に仕立てる「ナイ」といわれている。

テボ

竹を編んでつくった「手かご」、手かごといつても、「桑の葉テボ」などはかなり大型になる。

女の子の好んだ「花テボ」は、小型のテボの横竹に、何本かの赤く色つけした竹を入れて編んだきれいな「手かご」。春さきになると、これを車や自転車につんで花テボ売りが来ていた。

ナオス

「物を仕舞う、片づけること」で、「机の引出しにナオス」などという。

九州では広く使われるるので、方言とは気づかずに使っている人も多い。だが、東京あたりで「ナオス」といえば、「修理する」の意味にとられ、誤解を招くことが多いという。

ナーンガ アンタ

「どういたしまして」に相当することば。

お札をいわれたときに、相手へ返すことばがこれだつた。

面白いのは、豊前が「ナーンガ アンタ」で、筑前は「ナーンノ アンタ」だったという。それからすると、わが三花地区は、「ナーンガ アンタ」で、豊前の影響をうけていることがわかる。

ハシケー目に遭つたものだ。この場合は、首すじなどの肌が刺されるように痛がゆい、むずがゆい不快感をいう。もともとは、稻や麦の穂のギザギザのある突起部分の「芒」からでた語で、これが肌を刺す不快感の「ハシカイ」になつたもの。他人の気に障ることばかりいつていると、「ハシケーひと」といわれる。

近ごろは、ハシケー目に遭うことがなくなつたので、若い人にはハシケーがわからない。わからない人が多くなれば、ハシケーは消えてゆく。

バサレー

「バサレーある」は、「たいそうある」で、バサレーコつする」といえば、「無茶なことをする」になる。バサローともいう。

古語の「婆娑羅」^(ぼさら)は、「派手・乱脈にふるまうこと」や、「ふざけた無法なふるまい」をいうが、これが語源といわれれる。

「行たバツテン」、「行たケンド（ン）」。つまり、双方同じことだ。

両語のうち、バツテンは筑後がわ、ケンド（ン）は豊前がわの方言。三花地区でも両方耳にするが、最近は「バツテン」のほうが多く使われる気がする。

ハシケー

素肌に着た粗い着物などのように、ざらつく感じをいう。脱穀の「モミすり」や、「麦すり」では、ずいぶん

ヒスツイ

町内対抗ソフトボールが、「ヒスツイかかった」といえば、「一日じゅうかかった」こと。また、薬の服用が、「ヒスツイに朝夕二回」とも使う。

ヒスツイは、古語の「日^ひ一^ひ日^ひ」（一日中）のなまりだ。ヒ音のくり返しが発音しにくいためか、「ヒー^テ・ヒー^ト・ヒシ^テ・ヒツ^テイ」など、多くの地方で方言化した形で生きつづけている。

ブエン

「無^ぶ塩^{えん}」、つまり塩を用いてない新鮮な魚介類のこと。

日田は海から遙かに遠いので、むかしは、魚といえば

日もちのするように、塩ものが普通だった。それで塩を用いない鮮魚の方を、ブエンと呼んで区別したものだ。

昭和初期ごろまでの、つまり食生活がしのばれる懐かしいことばである。

ベベンチョヨ

「肩車」のこと。日田にはこの名のついた飴がある。浮羽方言では、ベベンチョコ・ビビンチョコといい、各

地でビビンという語が九州から中国にかけての広い地域で、肩車の方言になつている。

ビビンは、子どもが「鬢^{びん}」のあたりに手を掛けることから出た名とされ、日田のベベンチョも、その同類と思われる。

マテー

「おろか・のろま・物事にうどいこと」などを指していう。

語源は古語の「またし（全し）」で、辞典には、①完全である ②正直である ③おとなしい ④愚直である、とある。

つまり、もともとは愚かなほどの正直さをいったものだが、次第におろかさだけを指すことになつたようだ。

「孫^孫子守も、マテーコツア ネー」といえば、「容易ではない」の意味になる。

目にスガル

「目に浮かぶ」ことをいう。「目にスガツチョル」といえば、「残像が、強い印象で目に焼きついている」こと

になる。

目にスガルことは人によつていろいろだが、戦時下の妻たちが体験している、出征する夫との日田駅頭での別れの場面など、もつとも目にスガリ、忘れられないことだろう。

スガルは、日田以外にはほとんど使われないようだ。

モーガンコ

氷柱の「つらら」のこと。モーガンコを知つている人も、だんだん少なくなつた。

昭和三〇年代ごろまでは、厳冬期になるとワラぶき屋根の軒さきから、モーガンコがいくつも下がつてゐる風景が見られた。

「モーガ」は、牛馬にひかせて田畠をかきならす「馬鍬」のこと。字形に組んだ横木に長い歯が並んでおり、軒さきの氷柱がこの形に似てゐるので、「馬鍬の子」（モーガンコ）となつたものだ。

モノカノ

「耳うち」することで、「モノカノをいう」というふう

に使う。耳うちと違つて、モノカノの場合は、ヒソヒソと他人の悪口をいう——といったイメージが強い。

日田獨得の方言だが、福岡県の八女あたりでは、これを「モノモノ」という。相互関係はわからないが、同じ語源からでたものらしい。

モモツー

川に入るとき、「モモツーまでズボンをまくる」などという。「腿」のことだが、豊前の中津では、「モモタブラ」というそうだ。

タブラは、股や尻などの、ふくらんだ筋肉の部分をいう古語。日田の場合は、モモタブラ→モモタブ→モモターン→モモツーと、なまつたものだろう。

第二節 郷土のことわざ

あてたふんどしや向こうからはずるる

越中ふんどしは、うしろはひもに縫いつけてあるので
はずれないが、前に回した部分は、ひもにはさんで垂ら
しだけなので、向こう（前）からはずれ易い。

「頼みにしたり、當てにしていたことが先方から断ら
れる」などというとき、こういう。

人を笑わせる、氣のきいた文句を「しゃれ」というが、
むかしの人はしゃれが好きであった。その証拠にたくさ
んのしゃれた「ことわざ」や、「たとえ」が残っている。
そして、そのほとんどが、身近な方言によるものだ。

俚諺といわれるこれらのことばは、ふだんの暮らしの
なかでさかんに使われ、それが相手にすぐ通じ、どつと
笑いあうといったことが多かつた。

俚諺はまた、その発想が奇抜でユーモラスなものが多
い。

しかし、これらの俚諺は、時代の変遷のなかで次第に
使われなくなってきている。こうした貴重な「ことばの
文化財」が忘れられていくことは、残念でならない。
それらをいくらかでも記録する意味もこめて、郷土の
俚諺の一部を集めてみた。

牛の糞で段々重ね

丸いまんじゅう形の馬糞とちがつて、牛糞は軟らかで
段々重ねになつてゐる。その段々重ねと、交際の面でお
礼を何回となくくり返す、お礼の段々重ねをもじつてこ
ういう。

内股またこうやく

こうやくで、あつちついたり、こつちついた
り

へ張りついたりする。

内股に張った「こうやく」は、はげて反対がわの内股
自分にしつかりした考えがなく、あちらへついたり、
こちらへついたりする人にかけて言い、「ふた股こうや
く」ともいう。

蚕（の）ションベンで桑シイ

蚕は桑の葉を食べるので、桑のシイ（小便の幼児語）をする。この「桑シイ」を「詳しい」にかけて、なんでも物ごとに詳しい人を「蚕ンションベン」という。

木の毒はかずら

「かずら」はつる性の植物で、造林したスギやヒノキに巻きついて害をするので、木にとつては毒になる存在だ。そこで、「木の毒」を「氣の毒」にかけて、しゃれたもの。

彦山ガラガラ口ばっかり

英彦山みやげの「彦山ガラガラ」は、振るとガラガラ音のする魔除けの土鈴で、家の門口に下げる。

形は少しつぶれた球型で、横長い口があるだけ。このガラガラの口を人の口にかけて、口ばかり達者で、実行の伴わない者を評して「彦山ガラガラ」という。

ズーシーン（の）カテモン

ズーシーは、「雜炊」で、カテモンは「おかず」。つまり「雜炊のおかず」ということ。

雜炊は野菜などを焼きこんだ粥かゆで、味つけがしてある

屋根ふきのテボメ

屋根ふきが屋根の仕上げをするとき、なり（形）を直すことを「ホムル」という。

しつかりしないと「ズーシーンカテモン」になる。

猫（の）精進で長づづきがせん

「精進」は喪中や忌日に肉食せず、菜食すること。肉や魚のすきな猫が、人間なみに精進をしたとしても、とても長づづきするわけがない。

そこで、三日坊主で物ごとに飽き易く、なんでも長づづきしないことにかけて、こういう。

「ワラでふいていたころは、手でホメていたので「手ボメ」といった。のちに麦ワラでふくようになつてからは、「ホメ板」を使つた。

屋根ふきの仕上げの「手ボメ」を、自分で自分をほめることにかけて、「屋根ふきのテボメ」という。

ホイトン（の）博打^{ばくち}で声^{ナゾ}ジヨー

ホイト（乞食）は他人から金銭や食物をもらつて暮らすので、大金を持つてゐるわけがない。そのホイトの仲間が集まつてする博打は、百両かけても威勢のいい声ばかりだ。

大きなことばかりいつて、実行ができない者の、掛声ばかりだということにかけていう。

遠慮ひもじい、だて寒い
食べものを勧められて、遠慮して食べずにいると、あとでひもじい思いをする。伊達の薄着で寒い目に遭うこともある。

体面だけとりつくろつて格好つけていると、損をするとのたとえである。

アキヤスのスキヤス
アキヤスは「飽き易い」で、スキヤスは「好き易い」。なんでも新しいことや、珍しいことにはすぐに飛びつくが、長づきしなくて、熱し易くてさめ易い人をさしていう。

オーコをひん飲^{ぬう}だごつしちよる

人に頭を下れることを知らず、反りかえつてゐる人を皮肉つていう。オーコ（古語・あふご）は、木や竹の棒の

馬盜人^{ぬすど}ン（の）テートボシ
どういう理由かわからぬが、なみはずれて背の高い男を馬盜人と呼んだ。テートボシ（てとぼし）は手燭で、柄のついた小さな燭台である。

夜道のお供で、足もとを照らすとぼしを、大男が高い所で照らしたのでは暗くて用をなさない。「こうべ（頭）なし」ともいい、「団体^{ザウタ}だけ役に立たず、用をなさないことをさしていう。

両端を切りそいでつくつた「担ぎ棒」。

人がオーコを飲みこめば突っ立った姿勢になり、曲がることができない。棒でなくて、オーコを飲むという発想が奇抜でおかしい。

オガモン（の）干しもん

目立つてやせた人を「オガモン干しもんのごつある」という。オガモ(かまきり)は、見るからにやせた感じだが、それをさらに日干しにしたようだというわけである。

ゲズノ木に登る

「○○にヨメゴ（嫁御）に行くより、ゲズの木に登つた方がいい」などといい、「○○」は特定の地区名をさす。ゲズの木は、イゲ（とげ）だらけのカラタチのこと。つまり、過酷な農作業を強いられる○○地区に嫁に行くより、とげだらけのゲズの木に登る方がまだ楽という意味。

幹も枝もぜんぶとげだらけのゲズの木に登るという発想が、ふざけていておかしい。ただ、このことわざは、

額面どおりの意のほかに、むしろそれほど辛い労働を、明るく笑いとばしている響きがある。

ケンケンのツチカキ

「手足がよごれていること」を指してこういった。ケンケンは雉子（きじ）のことで、ツチカキはその足。

きじは羽毛が美しくきれいな鳥だが、足は土をかくのでききたないことからきている。むかしの子どもは、「ケンケンのツチカキ」が多かつた。

サンケラン（の）葉のしりのござ

サンケラはサルトリイバラで、「しりのござ」は「しりぬぐい」のなまり。むかしは山仕事などで便意を催したとき、木の葉であと始末することが多かつた。

そんなときは、カツボン葉（からむし）などが好適だ。サンケラン葉は、手ごろの広さでよさそうだが、じつは表面がつるつるで、ふきとるのには向かない。

良さそうで良くないときのたとえに、こういう。

茶腹もいつとき、茅壁^{かや}ン（の）三年

お茶を飲んでも、空腹の一時しのぎはできる。茅壁は、もう今日の住居からは想像もできないが、刈りとった茅でつくつた壁で、「これも長くはもたないが当分間にあう。どちらも、「一時しのぎにはなる」とのたとえである。

デーロン（の）フ笑い

デーロンは「やすで」。ムカデに似た体長二センチほど
の虫で、物に触ると体を丸めて臭氣を放つ。フは「か
めむし」で、農作物や果実の汁を吸う害虫。これも触れ
ると悪臭を発する。

ともに臭いもの同士のデーロンが、「フが臭い」と笑つ
たということ、「自分の欠点には気づかずに、他人の
欠点をあざ笑う」ことのたとえである。

ネコダ^{（の）} ような恩を着する
ネコダは、ワラを編んでつくつた「大形のムシロ」で、
これに糸などを干した。ムシロよりずっと広くて、かさ
ばつて重い。
その広さや、ずつしりした重さからたとえで、「ネ
コダ^{（の）} ような恩を着する」といえば、「押しつけがまし
い恩を着せる」こと。

鍋^{なべ}ン（の）なかん（の）どじょう

どじょう汁にされるどじょうが、鍋に入れられてしま
えば、もう絶体絶命、逃げようがない。

物事が行きづまって、どうにもならなくなつた状態を

いう。

ナメクジの正月アルキ

仕事がはかどらず、ぬらりくらりしている様をいう。

正月アルキは、嫁などが正月に里帰りすることをい
うが、正月なのでゆっくりできる。動作ののろいナメクジ
と、正月アルキをかさねて、仕事ののろい者を皮肉つた
もの。

コーズ（ふくろう）が鳴くのは、寂しい田舎の夜だが、
それが昼間も鳴いていれば、いつそう寂しさがつのる。

「昼コーヴが鳴く」は、そうしたへんびな土地のたとえだが、客足が少なく「商売がはやらないさま」にも使う。

ホイトン（の）村びいき

ホイト（乞食）は浮浪しているので、村の争いごとに
は、まったくかかわる立場はない。

その乞食ですが、「自分の身ぢかな村の方にひいきす
る」ということで、「わざかなつながりでも、身びいき
したくなる」人情の機微をうがつたもの。

みかけボブラ

方言は人をほめるより、けなしことばが精彩に富んで
おり、ボブラ（かぼちや）もそのひとつで、「なまけ者」
のこと。

ボブラと聞けば、だれでも夏の畠のなかにごろんと転
がっている様子を思い浮かべる。転がっていることから
の連想だろうが、ユーモアがあつておもしろい。

「みかけボブラ」は、「外見ばかりよくて、中味のない
人」をいう。